いま、子どもたちは

子ども集団を見ていて感じること

―児童館での様子―

秋庭　智子

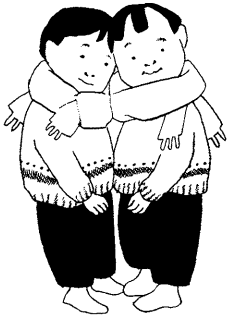
「ねえ、あっきー、今からドッジボールするから、審判しててほしいんだけど」「うーん、自分たちでやってごらんよ。いつも遊んでるからルールはわかってるでしょ」「えー、でも……」「何かあったら、すぐ行くからやってみて」。このように送り出した私の頭の中には、他の子どもとのゲームの約束と、ルールが十分に定着している遊びなので大人の目がなくても楽しんでほしいという願いがありました。様子を気にしつつ、横の空間で遊んでいたところ、十五分もすると少しずつ雰囲気が怪しくなり一人二人と遊びから抜けていき、残ったメンバーも殺気だって「今のは、絶対

アウトだ」「いや、そっちもさっき、ずるしたから、セーフだよ」「はあ？　ばかじゃないの、何いってんの、アウトなんだよ」「うるせー」と言い合い、ついには殴り合う事態になってしまったのです。

先程私のところに審判を頼みに来た子が、「ほらね、だからあっきーにいったじゃん。ちゃんと見ててよ」と、不服そうに訴えてきます。「横で遊んでて、わかったよ。R君とM君は当たっても、『今、タイム中』とか、勝手に『セーフ』とか言って、ずるいんだもん。あれじゃ、楽しくないでしょ。本当に強いなら、潔く認めてよね。R君やM君をアウトにして、自信をつけてる一年生がいっぱいいるって、知ってる？　正々堂々と戦ってほしいな」。

それでも、低学年には、なかなかルールを守るということが難しいようです。目を離せばすぐにずるをしたり、明らかに力の差のあるチームわけで戦ったり、勝敗しか頭にないのです。自分さえよければいいと、ドラえもんのなかに出てくるジャイアンのような子どもはどこにでもいるのだと、妙に感心してしまいます。

ところが、ここに高学年の子どもたちが加わるとちょっぴり様子が変化します。大人の話には全く耳をかさない子どもたちも、リーダー格の子どもの言うことは素直に聞いているのです。子どもたちは、遊びが上手で時には多少の荒っぽさも交えつつ集団をまとめていく、がき大将的な子ども



を通して、ルールを守ることやチームワークの大切さなどを自然に学び、成長していきます。

一年生のS君もドッジボールは強くガッツのあるタイプでしたが、アウトになっても絶対認めず、わがままなところがあったので周りからは迷惑がられていました。本人もなんとなく疎外感を感じていて、少し落ち込んでいたのですが、相変わらず自分の思い通りに遊んでいました。それに気づかせようとする大人のいうことには反発するだけです。私たちは「嫌われてもしかたないね、自分が気づかない限り変われないね」、そんな話をしながら様子をみていました。

それがある日五年生のK君に「S、おれのチームに来いよ」とかわいがってもらうようになりました。K君に、「最近S君のこと面倒みてくれるようになったね。すごく喜んでたよ」と話すと、「あいつ、みんなから嫌われてるんじゃん。だから……」。「うん、そうなんだよね。心配してたんだ」「まあ、Sがわがままだからしょうがないんじゃないの。俺がいっとくよ」との答え。そんなことがあってから、S君のわがままぶりは少し影をひそめ周りにも受け入れてもらえるようになったのです。

でも、本当に私がうれしく思ったことは、実はK君の成長で、「ずいぶん大人になったね。覚えてる？　昔はS君みたいだったこと」「えー？　しらねーよ」「S君も早くK君みたいになってくれるといいな」、そんな会話ができるようになったことなのです。

このように、児童館で子どもたちと接していると異年齢集団のなかでの子どもの成長が、よく見えてきます。ただ、最近の子どもたちは忙しくて、高学年になると塾、習い事が多く、児童館に来たときぐらいは、ゆっくりぼーっとさせてくれ

という子どもが多く大人の期待どおりには集団が形成されません。たとえ二十人子どもがいても、四、五人の小さなグループで自分たちだけの遊びを展開していることも少なくありません。

そっとしておいて欲しいという気持ちは、普段元気よく遊び回っている子どもたちがポロリともらすつぶやきの中からも読み取れます。「一、二年はいいよな。あの頃は、楽しかった」「赤ちゃんはいいね。のんびりできて」。わずか十二歳の子どもが言うせりふなのかと、思わず聞き返してしまいました。また、高校一年生の子どもたちが高校中退について話をしている中で、「俺は絶対しないな。今の生活には満足していないけど、ここまで十何年間積み上げてきた人生を全部パーにして、やり直すなんてやだ」と明言する子もいて、これもせつない気持ちにさせられました。

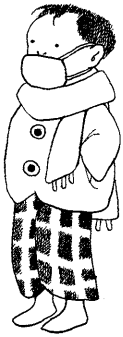
思った以上に不自由な思いをしている彼らに無理やり集団での遊びを提案するわけにもいかず、児童館で出来ることは何だろうと、考えてしまいます。それでも、何人かが集まり楽しそうに遊んでいると「何やってるの？　いれて」とやって来ます。さっきまではゲームボーイやカード交換をしていたのに、楽しいことには敏感です。

中には、自分から「入れて」と言えず、そばでじっと見ている子もいます。仲間に入れてもらえなかったら……とか、入っても自分には出来ないかもしれないと、恐れているのです。実際子どもたちは、友達の失敗や出来ないことに対してかなり責め立てることがあります。「初めてだから、教えてあげてね」「出来なくても大丈夫」、そうやって声をかけないと、友達への配慮ができない子が多く、また一度いやな思いをしたらそこから逃げてしまう子もたくさんいます。

子どもたちをみていると、自分の気持ちを伝え

る、相手の気持ちを理解する、そのやりとりがもっともっと必要だと感じています。殴り合うほどのけんかをしているので、どうしたのかと聞いてみても一方は全く理由が分からないということもあります。そんなはずはない、こんなに怒るからには理由があるはずともう一方にきくと、「ずっと前、学校でぶつかったのに謝らなかった」とのこと。「そのときには、何も言わなかったの？」「うん」「あのね。そういうときには、その場で自分で相手に伝えないと分かってもらえないよ。言えば、相手だった謝ってくれるはずだよ」。こんな些細な事が原因だったのかと、驚いてしまいます。

子どもが集まれば、それだけトラブルも増えます。自分たちで「暴力せずに口で言え」「今のはどっちも悪いんじゃないの？」と解決できる場合もあれば、大人が気持ちの橋渡しをしてあげないといけないときもあります。子ども自身が、いろんな友達がいて、いろんな考え方があって、一人ひとりが大切な存在であることをたくさんの子どもたちの中で学んでいくことが大切だと痛感します。



また、仲間といることでいろんなことにチャレンジする機会も増えます。新しいことや自信のないことは上手に避けて通る子どもが多いなか、一緒に遊ぶ友達の影響は、絶大です。ある日T君が「ドッジボールが嫌だから、児童館に行きたくない」と言い出して、私は正直〝まいったな〟と思いました。T君は線が細く、一学期は母と一緒に

登校し授業を受ける毎日だったので、児童館での様子も注意深く見守っている矢先だったからです。でも、T君は友達の間では結構仕切って遊んだり、ドッジボールも一年生同士では遊ぶこともあったので、〝二、三年生の迫力に圧倒されて入っていけないのかな？　決して弱い子ではないのにな〟と、はがゆく思っていました。

強制的に年上の子どもたちとのドッジボールに参加させる気もなかったのですが、本人がどうしても気にしているようなので、「こっそり練習する？」と誘いかけると喜んで始めました。そこへ二年生のR君が「何してんの？　俺もいれて」とやって来たので理由を話すと「それなら、俺が特訓してやるよ」ということになり、めきめき上達し、いつのまにか高学年とのドッジボールにも加わるようになりました。「僕はドッジボール強いよね。いつか、二年生も倒せそうだ」と眼を輝かせています。あまりに無理のある話でしたが、「よかったー。楽しくなったんだね。R君のおかげだね」と言うと、「うん。あれからいつも一緒に遊んでもらってる」と笑っていました。

どんなに大人が環境を整えても、最終的には子ども自身が成長していかなくてはなりません。気持ちを受け止めてくれる大人と違って、お互いに傷つけ合うことも多い子どもの集団ですが、時々大人が援助することで自分たちでコミュニケーションができるようになればよいと思います。児童館の中で、たくさんの子どもたちが出会い、集団を通して成長していってくれることを願っています。

（大田区立東嶺町児童館）